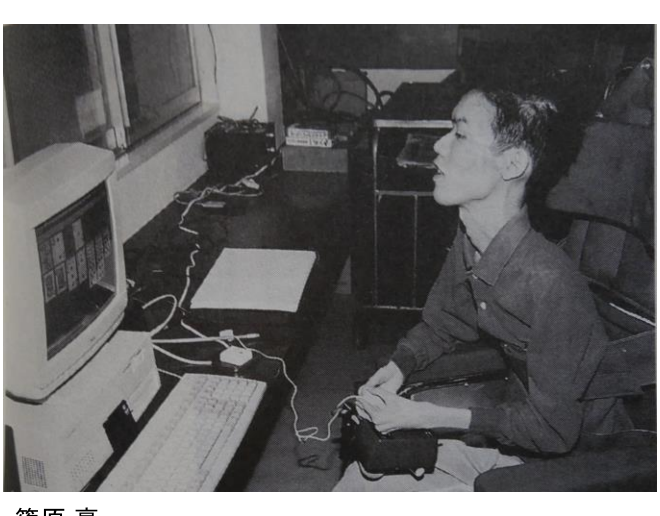
第10詩集「空の色」より



篠原 豪
1973年 2月 徳島県で生まれる。
1982年 3月 国立療養所徳島病院に入院。

心のカラ箱

さわやかな日差しが
蒼白した心を揺らめく
凍りきった街の中で
歓喜の鼓動がついえる

変化のない風景は
頭がない国の象徴
右へ習えの合言葉
時代遅れも程々に

過ぎ行く時を感じ
季節の知らせに思いをはせる
閉じ込もった心のカラ箱は
開かれた瞬間から光を照らす

心

吹きすさぶように
ココロが不規則になる
偽ることを無造作にしながら
その場をごまかすうちに

心から腐りかけの
たっぷり熟したトマト達が
腐敗の完全体を目指す

このハウスの主の居ぬ間に
育ちの悪いくだものの
主犯格が忍び寄る

心のネジ回しが遠のく
食べてるうちに食当たりが
そんなこともどこへやら
今日も心が不規則

過去未来

永く過ぎゆく
時間の影を
何回も何回も
追いかけていた

遠い日が眼の前を
遮断するように
カラ周りする

一日の終わりが
過去であるなら
今も過去の入り口
出口があるとすれば
未来への入り口が

過ぎゆくにつれ
遠のく記憶が
静かに消えてゆく
新しい過去を
造るために

雨雲

雨雲が動くと
すべてのものが
動いている気がした

覆われるなんて
もう慣れているけど
手の離れた空気を
一服気分で吸う時も
たまにはあっても

いつもどこかで
いろんなおしゃべり
今日は何の話題
誰かの噂が聞こえそう

ただの雨雲ならいい
小さな所から広がる
暗雲なんてまっぴら
すこし呼吸する場所ぐらいは

ある日の昼

真昼の眠気が襲う
何もいらない
問いかける
聞こえない
他の時代にいざなう
眼が覚める
どこに行こうか
また次にしよう

記憶が薄れない
詰めすぎると
どうしようか
偶然を待とうか
それよりも
強引に呼吸しよう

特別な大安
お昼が来た
眠くなる

意識がない
行き先を決める
現在のところ
正直な偽りのない
時代が来るまで
眠ることにしよう

失われたまま

今日も同じ街が色どる
時間の流れに染まるように
いつか夢に映し出す
ページの切れはしを
のぞき込む

もうすぐ見えて来る
眠っていた偽りの
正体が駆け巡る

隠された疑問が
時の経つ経過をよそに
透けて通り抜ける
過去のものが
すべての解答誌

僕が見た物は

姿を隠した君の宝物
居心地が合わないのかな
そんなこと知ってて
僕は無口のふりをしてた

君の落としてきた
赤いカーネーション
想い出が消えて行く
僕は慣れない風に乗る

部屋の片隅の見える
時計の空間のゆがみ
荒れ始めた君の素顔
そんな人どこから来た？
砂煙の使い手のしわざ？

似つかわしい姿が
僕を引き込む
この時計が操り師となり
全てを狂わす
あれは幻のいたずらか
もしくは・・・？

記憶

静まりきったさざ波が
打ち寄せる鼓動を交差させる
混ざりあった瞬間から
上昇気流に虹が弧を描く

澄みきった透明感が
沈みがちな心を揺り起こす
目の回りそうなまぶしい光は
不安定な脳裏を刺激させる

古い記憶に潜む光景が
つじつまの合わない疑問となって
逃れようのない現実に直面する

煮え切らない過去からの思いを
心の奥底の小さな隙間に
忘れるためのゴミ箱を置く

丘を

ひらひらと飛びゆく
のどかな丘を越えると
軽く伸び上がる全身が
なぜか飛行機雲を見下ろせる
そんな広大な気分がした

見えない場所では
世間の争いごと
平気な顔してだまし合い
意味のない金を取り上げ
いつの間にかゆがんで行く

どこの世界にも果てる事のない
すさんだ心を背負い
地中海をアップアップしながら
抜け道を手探りで求めるように

すっかり狭くなった身体が泥臭い
疲れきった時間が空を懐かしむ
次の停車駅を降りるとあの丘が見える

ルーレット

今日もにぎわいを見せる
ありとあらゆる昨今を
言い尽くせない人間模様によって

国民的アイドルがいないのが気になるのか
誰彼構わず自分をアピール仕始める
リクエストの多いテレビ各局

ドラマよりも現実性のある悲喜劇
気性の激しい人間離れした生物達は
当たり前の毎日から逃げていく
この世はそんなに魅力のない所なのか？

この国は未だ救世主の現れない
本命無きルーレット上に
どこに転がるかも解らない場所から
指をくわえたまま待ち続ける

判定は？

あの日のために
心を痛めずに生きよう
増えていく問題
捨てらるだけ　すてて

身体が叫ぶ　呼吸も乱れる
立ち上がりの悪い僕は球が散らばる
かくれた所で記録員がコソコソ

ぼくは素直にボール球を投げたのに
審判の判定は危険投球で退場
その上に出場停止処分

やっと処分が解けた
今度は試合に出られる

その言葉を待っていたのに
そんなこともお構いなし
出られない？？？

誰に頼めばいいのか
僕の保証人を依頼しようか
言い分を弁護してくれる
顧問弁護士を頼むしか・・・

社会の法則なんて
自分の訴えだけじゃ進まない
うっとうしい審判も沢山いるけど
敵のストライクゾーンを見抜くしか

窓辺

いくつも
飛んで往く
触れることのない
見ることのない
さわやかな窓辺を
見れる所
もしも
飛んで来るとしたら

そんな話を
信じるヤツなんて
突拍子面するのも
誰もいないかも

何でもいい
嘘でもいい
楽しかったら

こんな現実なんて
正面から受け止めるぐらいなら
いっそ途方もない
奇跡を温めるほうが

お大事に

大息をついた
何故か倒れてしまった
悪い予感がする
そっぽを向けた
野菜がからかい始める
僕はそんな挑発には
乗らない

身体が栄養を
欲しがっている
あたまの繊維が
煙となって消えていく

どこまで真顔で
いられるだろう
足先から見ると
ひきつっている
自分で立っているのも
結構大変なのかも知れない

ビー玉

青いフンワリするビー玉
転がるこだわりを持ちつつ
側にいる僕は風に乗る
透き通った体が導く
ビー玉が口を開く
新たなる明るい進化
街が涼しげにあふれる
人々がビー玉の光に
喜びに見える空の彩
転がるものに形ある影
ビー玉が音をなびかせる
美しい円形がそこにある

虫がいる

まぶしい光が降り注ぐ頃
今にも黒い偏食した虫が
だだっぴろい渦巻く水体に
大軍となり喰いちぎる

喰ってるうちにバカバカしくなり
踊らされた気がする虫たちが
異臭のする煙を吐き出し始めた
国を支配下に神の生み出す
未来が約束されない物語

ひからびた場所に見える
虫たちの闘いの妙技
人間の泥臭さを負かした
美しい虫がそこには生きている

夢の一夜

真っ白な無から始まる
色んな言葉が無数に舞う
ピラピラ叫ぶ花の窓
君はジョークのオンパレード
なかなかの美しいファッション

誰もいない昼下がり
奇妙な私のハイカラ人形
街中の芸人が集う夜の宴会
君におねだりするしかない
飛びきりのステージのお金

最良の胸騒ぎのする今宵
夕陽が新しい物語を告げる
広い透明な心を空に映し
優雅な日々との別れの日
現実の風に目を合わすように